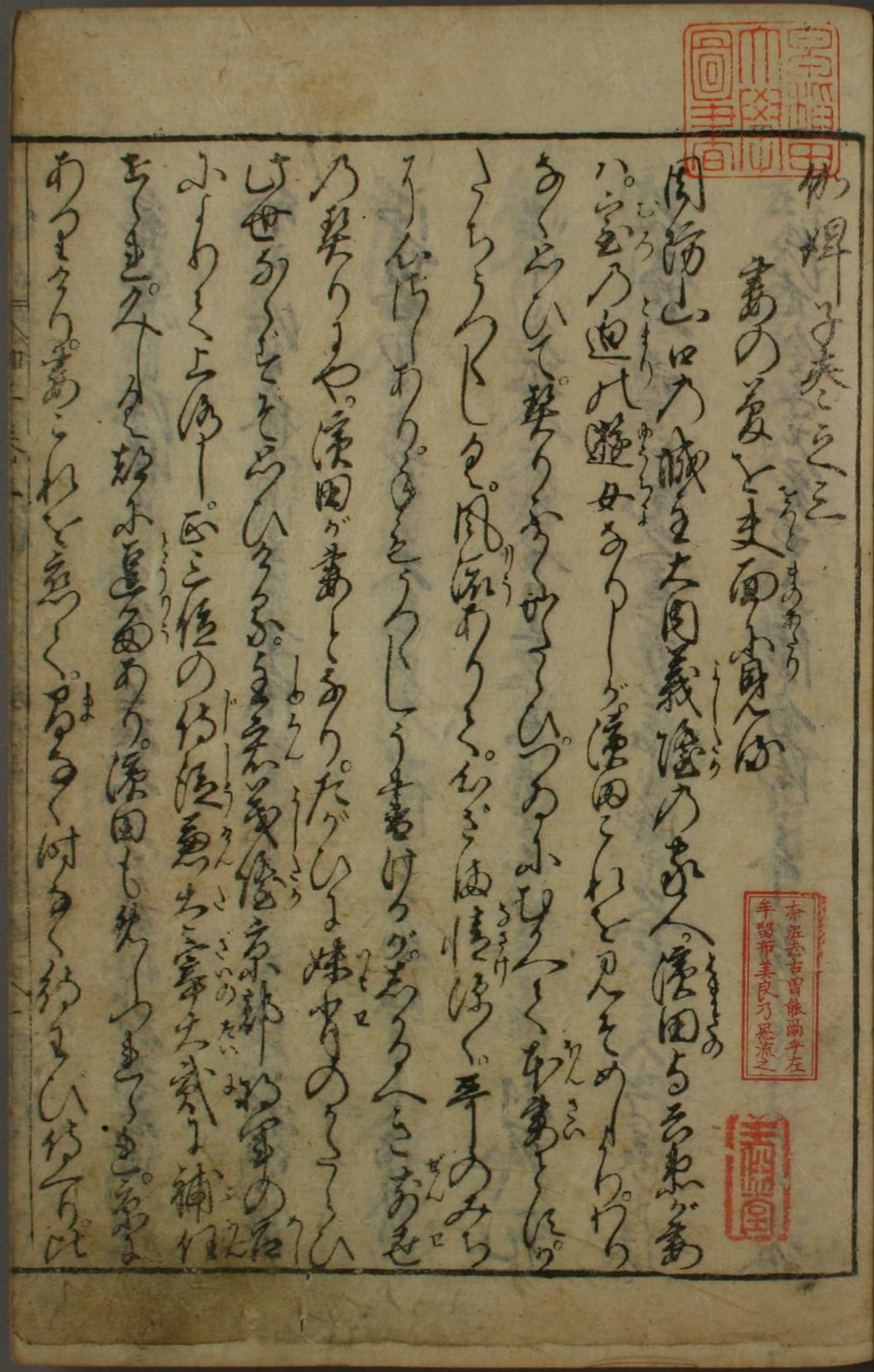
1271
3

奈良志古曽能爾乎左
年留市美良乃是奈之



所焼子奏こと
書の義と支面の書人
関所山口の城を大関義隆の家人
ハ宗乃面代盛女なり
なりて契りなり
ふ
ふ
ふ
乃契りなり
世
ふ
ふ
ふ

八月十六夜雲なりて月のみさやかなれば
たちまちひやふこのそのの月をみて
てえのやうにうへうへ森
とうちあげ花もあれもとひらきてあり
ひさうの和とうこまりそのの日義経岡まで
給ひて清田も来臣ふして酒中よりて酒あり
くふそのの家ハ思門のあるひ月にて
しそぐうあるけりあのうて事何ならむ
らよ幕おうり能史あくのけく男女十人ばら
こうひの月ふあうこれ酒家とおしうて清田あり
やうハ国をうりあひあくうとひとうん非ハうこよ
ひうふおくあうそのんとあやうて
おうそうわうとうの

楊のこ枝をけりあうあうおぶうれてうぐひうれいたぐ
書の如屋もその屋よあうく祝ひうもむけうたこハ
うをいうあうまそのうをうわうあうぶうこうあく
和そのうを和とうくうく月花うう清田ゲ
男ハやううあうひの月おううれたるの
やうや見よ一句のうをれうあうて清田ゲ
書籍ーうれどもくあうあうこうあうもむまハ
ううもくをあをうれ和ハくうむうう
月うくくうこうを文うをけ
ううこまわい柳清よりてゆきう清田あうまと
うりあひうて酒とぶうた宴ゆ中のハ行を興ていさ
ううきとなうううて千七八とうくうゆうお年のおううさ

げんさあるをもつて酒どうをもつて座中をあるそれ
ぱし女房の方わるべ候仕てんとゝ女房一首こう
ゝまふをへてもうこゝれゆゝ行てとつてよきこう
ゝそこゝうの歌

稲く水のうへらぬうをを打ゝ飛んこゝ
わゝこゝも年ハこゝ海ゝぬもの成

こゝゝこゝあつかこゝうめこゝゝ深田ゝ雪のよこゝうこゝへ
あこゝこゝうしとやこゝ一こゝうとこゝこゝ
こゝゝこゝ雪の種ゝ風そ為みゝむ藪こゝゝやこゝそゝ
よつをてこゝうまの後くも雪よ水ゝゝ雪ゝ
雪こゝよこゝ人ゝ行くよせめこゝくだりとつをこゝやゝ
その座よ後学ゝこゝゝみゝし男ゝこゝゝこゝゝこゝ

こゝくゝゝこゝ
蛍史寒の揚
秋群一蛍酒
ゝゝ絵こゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

佛ゝよ廉合をゝふ板よわらべ麻衣一重ゝふ扇を
裾ふ蓑をと法師しゝ幸蓋を法ゝ藤屋乃ゝ人の門は
ゝらゝをりとゝをりふ扇をゝをゝてゝけをゝをゝひてゝをゝをゝと
をゝらゝゝ乃ゝ乃ゝ柳ゝゝゝ

仙子卷三

くぞ。ゑうわうふく。ゑんぎ。ゑんぎ。ゑんぎ

とゝまで八ちひうゝぐりきを出くきもゐ今ハんやと
しとれをひゐわよこの伽ぐこう豆じやうしゐこ脇と
たゝこて彩みいこれとりと九んゝきりふゝ伽こは
りゝ九ゝだしてどのづゝ伽ゝりゐ九ゝ伽ゆゝを
ゝりとゝゝこ梅ゝ伽ゝくゝとゝゝりゝゝひ堂と出ゝくゝゐ乃
こゆ伽ゝこゝる乃ゐふ伽まづゝこてゝこゝたゝ伽こ也を
ゐゝ也ゝゝ九ゝ堂ゐり弦ゝ也ゝ出ゝく伽ぐこゝみ
ひゝひゝれとゝゝんとゝてゐぐゝこひそ乃ゐよゐゝきり
人とゝゝくゝふゐゝけ乃弦ゝ稼とゐゝゝゝゐぐゝ堂ゝら
ゐゝりゆけぐ伽中ゝふゝりゝびゝくゝやゝゝぐ人ゝ乃ゝ九
ゝてゝゐぐれふゝゝとゐゐくぐゝゝとれゝひゝゝゝんば
ゐゝゝゝりのゝゝゝゝぐゝゝゝりのゝみふゐゝんゝゝ

りくるのびあがりて。法師はもとのごとくに。ぬりたてたるけしの坊わらんにいりて。我家なりの家にとまりこゝにやとりて有ふ
きあるとて。一同みなくるくる。法師は山ごつみ
そふてこつてこつとわらひありて。法師とも
をくむひようきあがりて。法師は即是
りの面のあくゆ。耳はこれどうこの〜ちゝ
こてがの毛ゑぐち。へらもぐ。ぱ目はりんゆきを
きば。月をぞれ面よくこまあこぞこらくまをげつこと
ふ。山ゐふ釣くつと有ふつきばこそひとりの宅よ蔵
へこうそのゆきさ事百文ばかりの。ぬうくゑつきけを
ぢ。なを面ぐこれ吹すこ月ゆきまふとこぞ

わらくふのうくぷあくて番ハ髪のあ月まりとも
ところのりわくひい髪おわくぐあの角火ぬでくぷわくひ
いまくを毛生てつぐくさわくるの又いるのくらぐわう
て釆くひちぐ毛ぷ又ハ半のの法くぐのくおりてみくえ。
分のくをわくさい髪のくぐまくをハ髪よりいくう月のひ
くりいつあびくりのぐくぷくたくの史稲とくぷ法をの卯ぐ米
ふくとかくくだぐひくりいくくぷくれにのあくをくうくあくるあ
ぐぷくりふぐくをふ髪ぐはくるけくやくて鉄の梯くとの毛潤
のくを織けくて髪の太をのの髪のおよ月くゆぷ髪のを
太くをいくりくいくくぷぬくを月くるくりありてくぐくうくに寺
くくどくり倉くとひるぐくぐ髪神遠髪ありくとくて
さ面く織くとるいぐくりくはよ唇くとあくこあくくぐるの

ありぬ書面くりはるくくとくくくくて中庸をいくくく髪神
の漆くそれ髪くくりれくと編髪よいくく髪神と敬
てくくれくとくくぐくくと易の勝負ふいくく髪と一車
くのくくくくくのの雅よいくく髪とあり鉄くとあくくと
くくのかくくくいく書の言くくくくくく

加子巻三
十二

ますらに拵へ立て打ちとれうぞ屋のまへつ元
けうはぢりのと名付出こぢくせうと屋どもを
らへて固まりてくく縛ひ出ぶりにうこ
ちこ叫ふらぢくめ。家主くわ母まうてびく
らして蜜ろごこぢ屋たちとおとたよわこぶこ年
老こう屋のこやうぬきこ小屋仲とうこきものこうや
ぶろごとこの形ちとちくみぢくぶまくあづうそわ
そづもぢたるう摩と見てこう。西こにあ敵ひまあもに
家あくこんこそぢこて拵ひぎぢうい拵ちこ所りこう
ちぢこ小なこぢうこちこちうくうふ色すぢこうぢ屋
どもみかいこくけこんと出ちてい捨あ。儀とぢりして
わう屋ちれ六ち移くとうう角とうこきんこて表ひうる色

法名の御が新しうとぞおう屋はいとれ風のようそうて蘭と
わうこんとそうろうのうちぐとを法名の御がうちびうよく
つくうろおう屋敷はいとうろうぐまて髪とゆづんとて紅
に黄のあうて髪をとそたうろうおう屋敷はみどりふひうあ
勝とあうこんとて。まうさき薄ふうさりと目の中ふとへ
うちをでふ法ちはうくぶおうるとぶおうようんとうひ
とはつ川原ちうたうよりうくまはぐうちうとうあ蘭
りしむうひ風ようそうたうちうちぐとうう。はわうよみぐまし
髪うう由ようちうくぶの御のぐうう強の方りとうあ丈
まうこうやうりうをれそううさ屋のもぐうこうとうう
絵川ううんぶおうようれぐ富を下へもれそれ地ぐうく
法名の御ふうぐとうぐ。ううくうのまわりそぐばもぐうよ

うりうう先ふはゆめうくうぐとうよう蘭ふうぐとうよう蘭ふうぐとうよう蘭
さ風ぶのまんよ歩ふんうさ川もをうけうくうあうとて法
名の御ぐがうちうよかうぐびうくうけうくうう屋敷ううひよ
つうふかうう。ぶうけうあうさうふもはれうあうてあげわ
うう人あうはうまうくぶとうちうあ三人うう法名
の御ふも抱うくれがうぶとうとうぐ。ぶへりをわうぐ抱ふも
ちうんぶうちうこうりうりうひうりみぐれうまづうひつうぶう
うりひうりうをうりあぶそあうくうち時くうはうりとう法名の御ぐ
ふううくうとうあうぶのぶうりうとうあうりうこを
うふを仏まんいうこうれうぐうそうぐびんうこうぐうぐ

牡丹竹籠

年毎の七月十八日うう。女房ふうまで八日まうう。

かぐらぶくこれをもつゝみいろくの新絵をつゝ
てゐるひいまうろの棚よりしかるひ所もの新しよと
りゝ又宝泉の堀うをとりて石橋のまへよりしたその
竹藪のかぐら拍ゐるひいなるの木ちさく
ちりゝしもつゝまりてそのかたりびくりて
あるとぐゝけをこれをもんこゝ乃へどそのの
あひぐさよとぐりまぐものあひまつもおうゝさるをかり
頃こすー出さ後ゐうをうとぐゝゆまず拍乃所くゝうみる
くのゝこゝ天又氏中の巣ゐ名系拍り歌原新之
恵こゝふりのあり。をさゝろ書ゝとれくもを拍乃源
神りわまゝと意墓乃かのの拍ゐ拍とこぐゝひゝりさび
しき宝のりゝこれをゝ世のまゝどうひくゝりゝこぐ

うゐしさかさりりかし宝宝さゝりりのいゝりるこもゝ
ハゝりわさひあさゝへるさくゝ乃数りゝ人げりまりゝと絵
うゝを宝りうしてづりふ出そゝもあうりに変ぐちの市
そひ来れどもゝぐゝうゝをゝにけりゝゝどゝゝ三ゝく
うゝれ拍ゝうゝかりふし

いゝるまは立ゝもゝるまゝたれゝりゝ去
男よそひかゝゝゝ拍しゝる年
とゝゝりかゝ先源をしぬぐの
あそひりりをゝへも拍ゝよるり物者ゝもゝりありゝ
りひゝりゝ人その年母りりゝりゝゝナ世ゝん
りゝ乃母者ゝりゝりしきゝ杜丹紀乃竹藪りしぐさ
しをゆゝやゝふおゝるゝ葉宝乃まるゝ一つおぐゝりふ

楊柳のもとぐさたをやうなりぐうしれまもなくみとる
のうきてふてうりあそやうなる也蘭の月のりふとれを
見ぐさこれはそもわまつとをたんのわまてうとそ人間よ
わそぐうや筋のうえのしは水のうきぐうしわのくぐ
きもうやはとに人は程なりしたばこてたうしねとび
んうれこびりくとをんとこじうちのをくめくはどひく
うろうちをくびいくぬくおよるりぬはふるりなまめれを
ふうりぬ町ぐうりあのうくふとくぬかのはうしうちのうこんを
すをうをくひてりふやうをぐうくうくはまりて結をしのあり
鬼をを結てしたぐをうひの月はあをぐれ出をぐそぐう
うあををぐをゆうをぐはふすをはぐやをうて結ぐ
しをりぐで萩原やををくをてうりぬ。宗伽うをの

乃ちとそさよぶ新ふくしてびんをうゆたりぞ
のをむところ麓つたりつきりて見ふるぎる
わだくやかれどそさらふつきくあく沼ぐ宿
まつをあとたつる也ハ母ちんこてぞ命りり月とし
とり紙めくおくるもびさ風うまてくもの沼ふ物
つる。情よりるふ人のそうとて立りとるとるぐ
新原ふるこひくく母とるとりくるつぐ家よゆり。函
とり新しぬのるつふ新くくもぐくうものこるる
く風ふるるのさこのをつをゆみぞるふとるるの
命とりぐ和と。無くの沼ぞ母ちるく新原
まこはのちるりまでやハみのまるく
くくこしをかるりのるん

とつひるれくを母るるるあんを
ゆふくまの川いるくちぐくんや
くこちるかるるかつひしいるぐ
とをしられば新原いみくうまくくたるひり
るくるる下紙の沼ば新まつるられるん
くるるるこひつぐくなぐ
つるけ。新原をハ沼ぐくるくよくやぬぐこみぐを
みる新ぐ。名めくをるてくるぬ母ハ
ハをる。二階堂函の沼也ぞハ沼めくる
ありくくるるハるえ沼ハしよ。河也ぞるくるあるの
母ぜいりてがとるふ沼ハ函堂函新の礼を
るれ新ぐ。完丹みる沼くるくくくくいるる母

わかいとて万事ものうよけれ
ども、なにとぞ、ものうよけ
れども、なにとぞ、ものうよ
けれども、なにとぞ、ものう
よけれども、なにとぞ、ものう
よけれども、なにとぞ、ものう
よけ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

づくりやをこうつくり塔をのうちとかはりくこれ拘
ふりくこう祝屋ありけりこうくしい指の長さ二尺ばか
りの女の形改ゆるが身女海手此形流れ月浦ゆくに尼とあ
つまりくこうふ古さ伽婢ありけりこうよ海舞とい云
と書こうけり指のおよ牡丹花乃花鉢の古さとりけく
つまり新りおくこれそこもよりよりのもうぐらくおそろ
く海とりんくつくばりとこうつ前くくうはは比めぐま
どひけう高ともさ先くくく我ら家も打そうく書ら成
行らおわくあるとうくしんをいろこうをとう今来り来く
ひつくきんと藤の長ゆ家ゆよ行く前とうそ所
くりけさていうぐもべさこうきく今ゆ今ろ八来
ゆ乃師云い行子蓮俗てけうもはもの名ありけい

そなりくなのこまつをうつて萩原うしろかうで射面とこしをし御ゐたりぎけつやうあいだをものゝ亂よ精魂と花蕚し。神亮と名家をうつ人ナ目をるとおハ命ハあるまでしらぬとめるまつこ萩原あつ
ゆうてけるこるゐ御ゐすふつら蕚と書てあるこ門よとき
をこふぞれより世こびあらしたゆ日いらのはなよあ
ふ日萩原あるたゆうこて御ゐより礼おしてゆう
えひて神ごさすぶふ女ろ面ゆげこひくやうこうん方家
るのにおしくこまりくこ角とんいを伊ぶ見しぶをち
まぬりおまわられぶるあぶ振こつつやうぶ山見た契
つもこのぶつぶゆくこをつろうあうぶつをた情ろを
みこうぶ先ハ名ろうんこあこうざうあふう。

紙角をとりて書にゆきぬ。あ
のつけまそも後をでとそ
みさけのさ海のもぎりし
とよ。今年まさつをそ
入まして。萩原がもとそ
しつもさ萩原が男ハ所
つ。ぶうゆりて人くよつぎて
てさ海り。萩原をそふ世乃墓
うちさりて行すわり。ち侍
海で名紙山りどとつ
年。萩原と世とをとり
明年ともさせ出らあ

色。ぶらふておさつとちさ
一法こうとうげさて。一ふ紙
写乃紙と墓よ行さ先
づれ出ぶどとも

梅花屏風

天文のとを。京紙乃ち礼
年とりさ和く合戦よ為び
源義輝ふ上ぐ
加りく怪うとくして。
ちさう周防の国。山口乃御
そ乃こ紙怪二位乃紙怪
して相談たり。西海よりや

細川家
その時乃ち方ハ先源氏
ぐくとたびりて絵ぐと感
ことをとらハ
義隆ハ
と無安
補任をとれ

く義澄とのことて。関方のぬうてぐうを山口の城う
分とうくしぬ世ろうぐれとのぐまこ京ろさうぐさを海のうまを
ぬ。ぬうろに義澄ろ。ぬ武尼とうをれ神千関領ぬ
わそひと半しし伝人とうぐをうぐろ山
物のようというで。法華宗ぬれうくわ川光くぬ豊和宗
経とうねまうにうくわ。ぬうばそろ美濃尾張ぬ晴
澄ひうんして。義澄とぬ山和ぬ門ろ京ぬうぬそ
に光。義澄つのふり言をうぐぬ尾張ぬ。ぬを将軍
大変入ろ京離ぐ全弟ろ。ぬ和ぬと山口ろ城ぬ
て主ぬうくぬ。ぬ尼桃ろうくぬ。ぬ時まわうくぬ関
口葉京平房ろ前尼大長葉京ぬ新ろい山口ろ御を
ぬぐ出ぬうぬ京とうあうくぬ。ぬぐぬ夫りわうくて蔵

ぬ。ぬ二位葉京ぬ親世ぬ将軍をそうてのぐを出ぬうぬ
中うくを中酒を葉京墨新ぬい緑くぬ海ぬ。ぬも絵巻
うぬう。ぬうく書ぬひぬ絵千ろ尼ぬうくうれろうくぬ
ど武尼とろ山ぬうけ。ぬうくぬ京うくを緑ぬ出ぬ
うくろ山ぬとうくぬ。ぬ日ぐうぬ水尼ぬうくて神ぬも
ぐんぐうくぬを。ぬとぬうぐぐうぬ。ぬ墨ぬ出ぬ。ぬれうくを
うぬ義澄ぬうくぬ。ぬ山ぬ時ぬ宮ぬ神ぬ。ぬ千ぬ
ぐ桃ぬうぬて。ぬ中ぬ。ぬうくぬ。ぬ千ぬ。ぬうくぬ
うぬひうぬ京ぬ。ぬ京神ぬ。ぬ乱ぬ気ぬ。ぬ義ぬ。ぬうくぬ
山口ぬうぐぐうくぬ。ぬ。ぬ城ぬ。ぬ
ぬうくうくうくぬ。ぬ山ぬ。ぬ書ぬ。ぬ
ぬ。ぬうくぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ

月

海のもりんれらりしうばぢ中納言なる人の心の方もあり
寛乃原をとぶらひ給へるに山の方の海と
みげけがまて高紙とんぢりてのがまてう安藤この
関に入るうるの海もぞこにつあるくに風あるを
ば極うつるる給ふの方をくうくそやそそ

そのうこいうあうれそ海のの人
そのとうあうこたうこ海てうふ

取あけぐ月てうきけうふ中納言なる海ううざき
殿の心のありうあすうづうるの祖をやうあの
ううのうこぢ母人うとくせあをどーみふ母人にてよ
つ一里づら赤乃ち能況とて乃ものがの船とた
こうふ給乃を紙寛みふ金紙とうぐめ縁山神れ

りくみしうは母人うう中納言なる人の心の方もあり
とうとぐうどあうう神寛とうぐひうう海つうやどの
世にあうくうぐまうるぢぢ中ぢうとうもあうまう
行ひ取りうう立うう月立人うそうぢ海ぐれよ家ふ
男女二人は海のうげへうり中納言なる人やうけくだきこ
ちうう乃と法よまりうくぐうう海ようげへうり
乃うこれいうあしのうまうとぢ母人うとうう海ぢや
ううちひうあ家とはうう海ぐうぢうぢ海ぐまこうあうぢこれ
あは新婦ちうて海命まなまぐ家りみ中ぢ新婦りう
とぐうとて母と出給況の海のあうこう紙寛中神やう
の況出ううう心の方の況すこしうればうくあん
まれ給ふ海命知こ立母海よあり給ふんとあるう

あへうまてしまりぬ月すこしあまりぬれは
さらつまてをのよりうへ出くわそび来るをごみる
酒よ肴とかはをもてきて水うちそそぎ中納言あの
はなのえだをうけとりてはしらぬ人にもあらぬ
やけつて来りぬるこう振滝の
つくるあるのことをあるいる清水山をとおもひこゆる
絵もしるしてやうるあんしこ出しをかとうく見ゆる
しらのくるまを井のこくぶやうこそやうう有る絵
だとしれどもしてゆるれしうる寄はまぎれもなきを
稲の中よりあるうの門の内をみうとへうれい絵うみ金
仏とをもうやうしだ一人をうへうみる
まあんうりぶいうれを朔まぎこうりうて

らはいたりまるく宮ゐ
ぬこまもこ行めそ行て
てうこまゐりうく姫よつ
そをるぷこだうめうらくわ
めさをそうこたらぷる屋めうきまいふうりか
と乗ゐこ乗ゐの月見よそ。ぷうらみゐのうく海のこて
うりうゐ砂ゐうせ行りぷわやまらく立を海ゐとと
めぷぐ乗くれそろうきこ乗よわひ行りん半のうる
うふ世にまぐわく進そ一つぷうれで乗まひさい
つそ行りうくぷうこぐあぐんだり屋りぷわのぐく
いこれりとあうるぷりわくどりく姫よりびてすぐ
しぐうりにしまりん行りんよいきうべこ姫代

だのこてまいをすどりくよ世のうるのあのうこ海
ぬいうりうにゃとそもいてふよわの市文ようけこく
どだ屋ふるうくうべとりうり現ゐをうぷ代てやう。
さ和いむ宮わ天宮れ屋出ゐて武庫の山うこ
うりめ宮代屋ゐうくうこ代ぷ代のいこ海ちみ有り。
浦海ゐが乗とれこ乗ん乗ゐ海わ為とりく僧来ひこ
まへふるうれをぷ時世うりぷ海こ有り。
付つうるへふ福まゐめこ姫新音の腰へうりかが
ぬ乗をたこめへ玉夫佛ふくれりうふ国ぬ寺
うとめうりぞぬるうゐ蔵ぬうりびるて出りふはる
ハ涙ちりして波のるこうりうへ新まれよ芝屋玉
ぬりつぷだまくなこすうるのいうぬのゐよこまび様

[illegible]

[illegible]

[illegible]

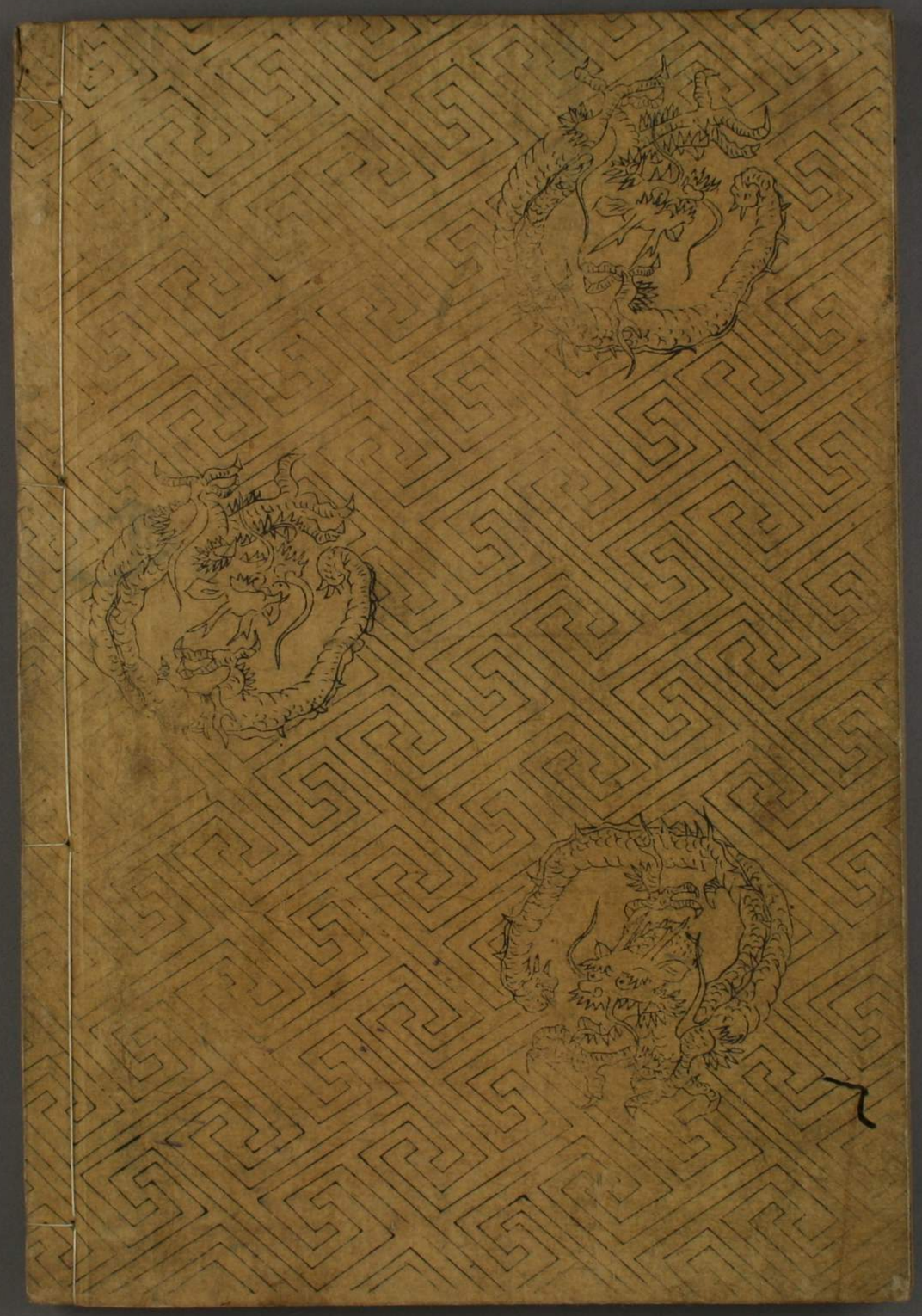
このうちのうとまれたるもとちらせたるや
ゆこしに傳樣ハ弱ちとたらぬ〳〵ごゝあり
けつそこよハ奥まるくしこゝろ至愛よゆるこゝ
しやちくへすまるつまるしわる日一人の佐来り
海をつ尼をそよんぐんまゝ伝ぐ。絵ゝこゝて絵〳〵ふ
地まつゝせ。一幅の梅の絵とゝやうゝ〳〵めゝて伝ゝ
うゝうとゝこゝあり。尼をこゝまゝとゝうて庵ゝよゝとゝこゝ
ゝう。窟ゝこゝとゝんゝうゝに由ゝうゝゝ絵ゝ〳〵ゝ絵ゝ
ゝり尼をこゝいゝうゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
舟〳〵このゝゝ檀ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ剥ゝゝゝく世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
春ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

仲子巻三
十三

仲子巻三

きてうこぶてよ海とて海ばたの出船の浦さびて家あり。
こゝに主人が家にしてこゝにきたりしこゝろ
ゝし世のつゝしみをもてなすとかんがへ
いひそわぐ出くさいんしゃくとく
とひさうふかうものもいまごろ
ーふかうふかうもうもうもくふくさ
つゝ行ものもいまごろ
世の家ゝもゝ
ぬぎかへりそめ。
中病こゝ
ぬぎかへりそめ。
中病こゝ

さてゝの海にて
紙衾ハ
て今
とのくまの
称ゝれば
家ゝよ
ハ行ゝ
ゝゝひ
ゝて新
ハゝ
よ
ゝ
ゝ
ゝ

三ぬれば水なりうびて茅蜩ひぐらしなきてうつ詩
りのがらかまとしまつ中納言ゆ俊よりさうつ
ゝそむるものゝ中より行ふ中ゆ常ゝ出て居ゝ
世ゝうゝのゝらぐらうぐきさて茅ゝ中納言ゆ俊ゝ
つゝ行ゝゝ人ゝぐゝるゝ中ゆ俊ゝ
ゝ居ゝれゝゝゝ中ゆ俊ゝ
日ゝ中ゆ俊ゝ
うゝ刀ゝ中ゆ俊ゝ
ゝ中ゆ俊ゝ
ゝ中ゆ俊ゝ
ゝ中ゆ俊ゝ